

慙愧の涙

大和町 野田 恵光

□真宗の教誨で出会った人

建物を囲む高い塀、部屋を仕切る鉄の扉、そして窓のない廊下。たしかに刑務所は私の日常と距離を置く特別な場所といえます。

矯正施設としての刑務所には、被収容者の悩みや思いを聞き、心を整える宗教教誨があります。真宗の教誨では「正信偈」のお勤めを一緒に行い、小さな机を挟んで向き合います。教誨を始めたころの私は、被収容者に対して懐疑的でした。罪を犯した人というレッテルを貼って対峙し、その思いに寄り添う姿勢を示しながらも、言葉や心情の真偽を懸命に探っていました。

ある日の教誨室で、年の若いその被収容者は睨みつけるように私を見て話し始めました。口調は静かですが、重い言葉が続きます。その人は、今日お勤めした亡き人、わが子への愛情を切々と語り、「あの子が信で、私が生きている」と自分に投げかけるように二度ほどつぶやきました。みるみる涙が溢れ、大粒の涙が音を立てて畳を濡らしていきます。その様子に疑念を抱く余地は全くありません。

「慙愧」という言葉があります。「自身の罪に気づき、内にも他にも恥じること」です。この年若い被収容者が流した涙は、まさに自らが犯した罪を悔い恥じる慙愧の姿だったのではないのでしょうか。金子大栄先生は「世の中は悪人の慙愧の涙によってうるおされて、善人の驕りによって乾いてくる」と教えられています。

だれもが煩惱具足の人間です。関係性の中に生き、業縁が罪を導きます。親鸞聖人は、私たちのあり様を、『無慚無愧のこの身』と指摘され、「罪を恥じる心がないこの身には、まことの心なし」と断言されました。私たちの日常はいつでも自分ファースト、同じ人間として刑務所の内か外かは関係ありません。